

「フルート」外伝第十三話

金陽樹きんやうじゆの城

1

ロムド国の王都デイーラにそびえるロムド城。

その王の執務室に数人の男たちがいました。ロムド王、リーンス宰相、ゴリス、ワルラ將軍……ロムド国の最重要人物たちです。

銀の髪とひげのロムド王は、机に向かって山のような書状に目を通していました。リーンス宰相が静かな声で書状の説明をすると、王がかたわらにゴリスを呼んで意見を聞きます。黒ずくめの服に大剣を下げたゴリスは、大貴族なのに剣士と呼ぶ方がふさわしく見えます。ワルラ將軍は太い腕を組んで、壁に掛かった国の地図を眺めています。老將軍は執務室でも濃紺の鎧姿です。

執務室の中には、もう一人の人物がいました。輝くような長い銀髪に灰色の長衣の瘦せた青年です。非常に整ったその顔は肌が浅黒く、右目が青、左目が金の色違いをしています。中央大陸随一と名高い占い師のユギルでした。部屋の隅の椅子に座り、黙ってテーブルの上の占盤を眺めています。

すると、ユギルが急に顔を上げました。部屋の人々に向かって言います。

「到着されました。間もなくこちらへおいでになられます。」
美しい占者の青年は、ことばづかいも丁寧すぎるくらい丁寧です。

おお、と一同はいつせいに部屋の入り口を見ました。期待する顔で待ちかまえます。

ほどなく、外の通路から言い合う声が聞こえてきました。

「今すぐは無理だ！ 私たちは城に着いたばかりなのに！」

「かまわん。早く父上たちに挨拶せねば」

「駄目だ、私はこの格好だぞ！？ こんな姿で国王の前に出られるわけがない！」

「だから、かまわんと言っている。誰も気にしたりはせん」

「そんな馬鹿な！！」

まるで男二人が話しているようですが、片方は間違いなく若い女性の声です。会話から察するに、もう一人の声の主が無理やり彼女を王の執務室へ引っ張ってきているようです。

ロムド王は思わず苦笑しながら合図を送りました。それを受けてゴリスが扉を開けると、そばまで来ていた男女が驚いて立ち止まります。いぶし銀の鎧を着た大柄な青年と、長い金髪の背の高い女性です。女性髪を後ろでひとつに束ね、白いシャツに茶色の上着とズボンを身につけて、若草色のマントをはおっていました。とても美しいのですが、男の格好です。腰には細身の剣まで下げています。

ロムド王が言いました。

「到着を待ちかねておつたぞ。二人とも中に入りなさい」

年をとっても王の声は若々しく、あたりによく響きます。たちまち女性が真っ赤になって後ずさりしました。

「わ、私は こんな格好で陛下の前に出るような不作法をするわけには……」

「かまわんと何度言ったらわかるのだ、セシル。いいから来い」

大柄な青年は強引に女性の手を引いて執務室に入っていきます。その後ろでゴリスがすぐに扉を閉めます。逃げるのができなくなつて、女性は立ちすくみました。赤くなつたり青くなつたり、めまぐる

しく顔色を変えながら、部屋の中の人々を見回します。

そんな彼女へ王は穏やかに話しかけました。

「よくおいでになった、エミリア姫。メイからここまでは遠い。長旅で、さぞお疲れになったことだろう」

女性は面食らいました。ロムド王は男の格好をしている彼女を奇異の目で見なかつたのです。王だけではありません。部屋に居合わせている全員が、平然と彼女を眺めています。濃紺の鎧を着た老軍人に至っては、これは実に美しい方だ、としきりに感心していました。

青年がロムド王に向かってお辞儀をしました。

「ただいま帰還いたしました、父上。お許しを得ないまま長らく城を留守にして、まことに申し訳ありませんでした」

青年はロムドの皇太子のオリバンでした。北の峰から移住するドワーフたちの警備役として、ロムド南西部にあるジタン山脈へ行き、その後、城には戻らずに、金の石の勇者たちと隣国メイへ向かつてしまったのです。オリバンがロムド城を出発してから、かれこれもう三ヶ月が過ぎていました。

王はまた苦笑しました。

「まったくだ。エミリア姫と出会わなければ、今でもまだ城には戻らぬつもりでいたのだろう。まこと困った皇太子だ」

と、しかつめらしく説教しますが、すぐに面白がるような口調に変わります。

「で、どうであった？ ユギルが占ってメイに送った縁談の書状だ。さぞ役に立ったであろうな？」

「それはもう」

とオリバンは答え、照れたように顔を赤らめました。そのかたわらで女性も真っ赤になりましたが、すぐに王に向かってお辞儀をしました。

「初めてお目にかかります。亡きメイ国王の娘で、エミリア・セシル・ガダ・ルフィンと申します。賢王と名高いロムド国王陛下に拝謁することができて、まことに光栄に思っております」

今までとまどっていたのが嘘のように流暢な挨拶でしたが、彼女がロムド王にしてみせたのは、拳に握った右手を胸に当てる男のお辞儀でした。そのまま王へ深々と頭を下げます。男装をしている彼女は、ドレスの裾を広げる女性のお辞儀ができなかったのです。

「おお、これはまことに凛々しい」

と王は笑顔で言いました。やはり、男のようにふるまう王女に少しも動じることがありません。同室の重臣たちも同様です。また王女がとまどった表情に戻ります。

すると、部屋の隅から銀髪の青年が言いました。

「ご心配には及びませんが、王女様。この城の者たちは男装の麗人を見慣れておりますので」

メイの王女はさらに目を丸くして青年を見ました。表情豊かな女性です。何も言わなくても、その考えていることがわかります。オリバンが苦笑いして言いました。

「いいや、セシル。彼はロムドの一番占者のユギル。美しくても、れっきとした男だ」

銀髪の青年は黙って一礼しました。女と疑われても落ち着き払っていて、なんだかすましているようにさえ見えます。

王女はたちまちまた真っ赤になって弁解しました。

「も、もちろんそうだろうとは思っていた。だが、フルートのような例もあるし、ひよっとしたら、と思ったのだ」

「ほう、あいつはまた女になったのか。声変わりをしても、まだ大丈夫だったのか」

とゴーリスが口をはさんできました。貴族らしくないざつくばらん

な口調に、王女がまた驚きます。

「彼はゴーラントス卿。フルートたちはゴリスと呼んでいる。フルートを勇者に育てあげた剣の師匠だ」

とオリバンに教えられて、あなたが、と王女は驚きました。

「フルートはあなたからもらった剣をとて大切にしていた。炎の魔剣と同じくらいに。彼の心の拠り所になっているようだった」

ゴリスは微笑しました。ひげにおおわれた無愛想な顔がほころんで、暖かい表情に変わります。

「それならばよかった……。頼りのひとつもよこさない薄情な弟子だ。こちらがどれほど心配していても、そんなことは想像もせん。だが、元気でいたなら、それでいい」

なんだかフルートの父親でもあるようなことばです。そして、王の執務室にいるというのに、本当に庶民のような口調で話しています。

リーンス宰相、ウルラ將軍、と重臣たちが次々王女に挨拶した後で、ロムド王がまた言いました。

「ロムドはあなたを心から歓迎している、エミリア姫。なりは大きくとも、なかなか女人に関心を示さなかつた息子に結婚を決意させたのだから、あなたは実に大した女性だ。ユギルから、あなたとオリバンとの縁組みがうまくいくと聞かされて、我々は皆、本当に喜んだのだ」

すると、その占者がまた口を開きました。

「わたくしが最初に王女様の象徴を拝見したとき、王女様は白く猛々しいユニコーンの姿をなさっていました。殿下や勇者殿たちの敵となるのかとも思われましたが、その未来を見ていくうちに、ユニコーンは離れ、王女様は本来の象徴に変わられたのです……。王女様の象徴は、白い幹に金色の葉の美しい樹です。メイからこのロムドへ移り、ロムドを守るように枝葉を広げて行く姿がはっきりと見えました。王女様はきつとロムドにとって大切な存在になっていかれます」

姿は若いのにひどく年老いて聞こえる声に、王女は何も言えなくなりました。青と金の瞳に何もかも見透かされているような、落ち着かない気持ちになります。

すると、青年は色違いの瞳を細めました。敵かさが溶けるように消えて、美しい微笑が広がります。

「王女様の象徴の樹の下では、青き獅子も疲れた心と体を横たえてまどろみます。青き獅子は皇太子殿下の象徴。王女様は殿下の心の癒しと支えになられることでしょう」

「それはまったくその通りだ」

とオリバンが即座に答えました。のろけているようにも聞こえますが、当人はいたって大真面目です。王女のほうがまた真っ赤になります。そんな様子に、王や重臣たちはいつせいに笑いました。

やがて笑い声がおさまると、ロムド王がまた言いました。

「姫にはロムド城の男装の麗人を紹介せねばならんな。もうこの部屋にきているのだ」

すると、その声に誘われたように、部屋の片隅に一人の人物が姿を現しました。ほっそりした長身の女性で、白い長衣を着込み、手には杖を握っています。首から下げているのは、光の神の象徴です。

「彼女は白の魔法使い。ロムド城を守る四大魔法使いの長で、ユリスナイに仕える神官だ。女性だが、ロムドで彼女に勝る強力な魔法使いは他にはおらぬ」

とロムド王から紹介されて、女性は頭を下げました。その長い髪は王女と同じ金色ですが、王女よりずっと淡い色合いをしていました。それを束ねる金の髪飾りの上で、赤い石が光ります。

「おそれいます、陛下。ですが、男装の麗人、というのは過分なおことば。拝見するに、王女様は本当に美しい方であられる。私などと並べられては、それこそ失礼になりますよ」

着ている服も男のものならば、話す口調も男性のようです。しかも、メイの王女よりもっと強いものを秘めていて、王に対してもはつきりとものを言います。顔立ちも、決して不美人というわけではありませんが、厳しさのほうを表に出してしまっています。

白の魔法使いは改めて王女に言いました。

「ロムド城での王女様の警護を、私が務めさせていただきます。どうかお見知りおきください」

そう言っただけで彼女が見せたのは、片手を胸に当てて頭を下げる、男性のお辞儀でした。王女に負けないほど板についていて、不自然さがありません。

王女は呆気にとられ、やがて、額に手を当てて笑い出しました。どうした？ とのぞき込んだオリバンへ答えます。

「なるほどな。あなたたちがメイで私を少しもおかしな目で見なかったわけだ……。なんと公平ですばらしい城なのだろう」

素直な王女の賞賛に、ロムド王が笑顔になりました。

「ロムド城を気に入っていただけのならなによりだ、エミリア姫。結婚式はまだ先のことになるが、我が新しい娘として、この城を自分の家と思ってもらえれば嬉しい」

「陛下の家族にかぞえていただけ、私のほうこそ本当に幸せに思います。どうか、私のことはセシルとお呼びください。男の名ですが、これが私の本当の名前です」

そう言っただけで王女が見せたのは、やはりメイ式の男性のお辞儀でした。颯爽とした姿には清々しささえ漂います。

大きくつなずく人々の中で、ロムド王が言いました。

「我がロムド国へようこそ、セシル姫。この国が、あなたのもう一つの故郷となるように」

セシルはいつそう深くお辞儀をして、そのまま顔を上げなくなりま

した。オリバンがそっと背中に手をかけると、急にその胸に飛び込んで、顔を埋めてしまいます。

故国メイで長い間虐げられてきた王女は、ロムド城の人々の暖かさ感激して、ついに泣き出してしまったのでした。

2

メイの王女の感涙が落ち着くと、ロムド王は言いました。

「セシル姫は長旅でお疲れだ。準備した部屋で休んでいただこう。オリバンはこのまま残って話を聞かせなさい」

一時にせよ、オリバンと離ればなれになることを命じられたわけですが、セシルは素直に承知しました。オリバンはこれからメイ国のできごとを報告することになります。セシルと出会ったいきさつはもちろんです。メイがロムドに対して企んでいたことや、メイの内情など、セシルにはあまり嬉しくない話もしなくてはなりません。ロムド王はそれを配慮して、セシルに席を外すように言ってきたのでした。

「後であなたの部屋へ行く」

とオリバンに言われて、セシルはうなずきました。白の魔法使いの後について執務室を出ます。

「いやあ、若いというのは実に良いですなあー！」

「文句なくおまえの過去最高の戦果であるな、オリバン」

というワルラ將軍やロムド王の声が聞こえ、どっと笑い声が上がります。

賑やかな執務室から遠ざかりながら、白の魔法使いがセシルへ話し

出しました。

「おわकारの通り、ロムドは非常に自由な気風の国です。国王陛下は年齢や地位や身分、性別などで人を差別することをなさいません。そのため、陛下の周りには、能力的にも人間的にも素晴らしい方々がお集まりになっています。ですが、すべての国民、総ての城の人間がそうだというわけではありません。セシル様がおいでになったメイ国は、つい先日まで、ジタン山脈を巡ってロムドと戦った敵です。メイは直接王都を攻めることはありませんでしたが、連合国のサータマンは疾風部隊や飛竜部隊でこの城まで攻め上つてきました。その記憶はロムド国民にはまだ生々しいものです。セシル様が、そのような戦いに関係がなかったことは、ユギル殿からも聞かされて承知しておりますが、中にはセシル様を敵のスパイや回し者ではないかと疑う者もいるのです」

魔法使いの女神官は、厳しい口調で厳しい現実を語っていました。取り繕ってもどうしようもないのです。王たちはメイの王女が皇太子妃になることを歓迎していますが、ロムド城やロムドの国内には、それに強く反対する人々がいます。下手に安心させるようなことを言えば、逆に王女が危険になるかもしれないのです。

セシルは静かにうなずきました。

「それは承知している。私は敵国の人間だ。いくら同盟を結んだとしても、それを本当のものとして信じてもらえるまでには時間がかかる。その間に誤解されてしまうこともあるかもしれない。それでも、私を新しい家族と言ってくれださった国王陛下の寛大さを嬉しく思っている。あなたのような優秀な護衛を私につけてくださった、陛下のご厚情も」

白の魔法使いはセシルを振り向くと、すぐにずっと穏やかな声になりました。

「セシル様は賢い方でいらっしゃる。きっと、じきにロムド国民もセシル様の本当のお姿に気がつくことでしょう」

「それならば良いが……」

王女は今度は自信のない表情になりました。故国で自分が誰からも顧みられずにきたことを思いだしたのです。

すると、通路を歩く二人のすぐ目の前から、急に男たちの声が聞こえてきました。

「やれまあ、なんとも似たような二人じゃな。姉妹が歩いているのかと思うたぞ」

「なるほど、これならば白が護衛役に適任ですな」

「ク、ダ」

声はしますが、人の姿はどこにも見当たりません。セシルが驚いていると、白の魔法使いがじろりと行く手をにらみつけました。

「こら、無礼だぞ、おまえたち。きちんとセシル様にご挨拶しないか」とたんに、通路に三人の人物が姿を現しました。深緑の長衣を着た老人、青い長衣を着た見上げるような大男、それに、赤い長衣を着た小男です。小男はつややかな黒い肌と縮れた黒髪をして、猫のような金の目をしていました。全員が、白の魔法使いと同じように手に杖を持っています。

女神官がセシルに頭を下げました。

「申し訳ありません。私と共にロムド城を守っている者たちです。それぞれ、深緑の魔法使い、青の魔法使い、赤の魔法使いと呼ばれています」

「では、あなた方があの有名な四大魔法使いか　　！　　噂はメイにも聞こえてきている」

「ほほう。わしらはメイではどのように語られておりますか？　金の石の勇者たちのように、似ても似つかない偉人になっているのではありませんかのう」

と言って、老人が濃い眉の下からセシルを見つめてきました。穏和

に見える顔の中で、二つの目が驚くほど鋭い眼光を放っています。セシルが思わずとまどつと、深緑！と白の魔法使いがたしなめました。ほっほつと老人が笑い声をたてます。

「失礼しました、王女様。なにしろここはロムドで一番大切な方々が住まう場所ですじや。正体を隠して忍び込む輩がないとは言えませんが、もっと気高くお優しい姿が見えますの。わしは真実を見抜く目を持つ魔法使いですじや。王女様がまこと皇太子殿下のお后にふさわしい方であることは、しかと確かめさせていただきました」

「あのユギル殿が太鼓判を押された方だ。深緑が確かめるまでもない」と白の魔法使いはまだ叱る口調でしたが、セシルのほうは、にこりと笑いました。

「ありがとう。有名な四大魔法使いから直々に合格点をもらえたとは光栄だ」

「おお。これはなかなか潔いお方だ。あの皇太子殿下に似合いのお后となられそうですな」

と青の魔法使いが感心します。口調こそ丁寧ですが、本当に、遠慮のない魔法使いたちです。セシルがまた、ありがとう、と言ったので、深緑の衣の老人が言いました。

「白と姉妹のようじやと言ったが、ちと訂正じやな。未来の皇太子妃殿下のほうか、白よりずっと素直じや」

「それは見ただけでわかるでしょう。歳だつて王女様のほうがずっとお若い。かわいらしさという点でも、白よりはるかに」

と言いかけて、青の魔法使いが急に飛び上がりました。白の魔法使いに思いきり足を踏まれたのです。

「素直じやない年増で悪かったな！」

たった今まで毅然としていた女神官が、少女のように拗ねた表情で大男をにらみつけます。

「こちら、こんなところで夫婦喧嘩はやめんかい、白、青」と深緑の魔法使いが笑つてたしなめたので、夫婦？とセシルはさらに驚き、白の魔法使いは真っ赤になりました。

「だ、誰が夫婦だ！馬鹿を言うな！」

「そうそう。我々はそのような関係では」

「ト！パリ、カ！？イ、アオ、オカ、セー！」

平然と話を流そうとする青の魔法使いに、赤い長衣を着た小男が食つてかかります。異大陸のことばなので、セシルには理解できませんが、青の魔法使いを問い詰めていることはわかります。厳然としていた女神官が、耳まで赤くなつてうるたえています。

そこへ呆れたような声が話しかけてきました。

「これはこれは意外な光景。静けさと平穩に包まれているロムド城で誰が騒々しく話し合っているかと思えば、四大魔法使いの皆様方ではありませんか。しかも、いつもは冷静沈着な白の魔法使い殿や無口な赤の魔法使い殿が大声を出しているとは、意外中の意外。いったい何事が起きたのでしょうか。まさか四大魔法使いに分裂の危機でも？いやいやいけない、皆様方の決裂はそのままロムドの決裂。この道化めになにとぞ仲裁をさせてください」

驚くほどの早口ですが、言っていることは、はつきり聞こえます。声の主は痩せた中年の男でした。通路の真ん中に立つて大げさな身振りで深々とお辞儀をしています。その服は赤と緑に鮮やかに別れていて、鈴付きの青い帽子をかぶり、顔には一目見たら忘れられないような奇抜な化粧をしています。

「我々は決裂などしていません」

と白の魔法使いは憮然として、セシルへ言いました。

「こちらはトウガリ殿。いつも王妃様と一緒にいる宮廷道化殿です」
「王妃様と？」

セシルがまた目を見張ったところへ、通路の先の階段から追いかけるような声が聞こえてきました。

「トウガリ！ トウガリ！ どうしましたの！？ 何か悪いことでも起きてますのー！？」

王妃にしては幼すぎる声です。やがて階段の下から駆け上がってきたのは、プラチナブロンドの巻き毛にピンク色のドレスを着た少女でした。

「これはメーレーン王女様」

と四大魔法使いたちがお辞儀をしましたが、少女は返事をしませんでした。もっと興味を惹かれる人物を見つけたからです。顔をばあつと輝かせて、また駆け出します。

「まああ……あなたがセシルお義姉様ですわね！？ お兄様が手紙で教えてくださいました！ すてきすてき！ 晩餐会までお目にかかれなれなれと思ってきましたのに。メーレーンはお義姉様にお会いできて、とても幸せですわ！」

少女はセシルのすぐ目の前に立っていました。大きな灰色の瞳をきらきらと輝かせ、頬をバラ色に染めて、本当に嬉しそうな顔をしています。その無邪気な素直さに、セシルもつられて笑顔になりました。「メーレーン王女様ですね。旅の間中、あなたの兄上からお話を伺っていました。聞いていたとおり、本当にかわいらしい方だ」

「お義姉様こそ、本当にお美しいですわ。月の女神がお城に下りていらしたのかと思いました。お義姉様、これからどちらへ？ ぜひ、メーレーンやお母様と一緒ください！」

メーレーン王女は十三歳でした。自分自身をメーレーンと名前で呼んで話す様子は、実際の年齢より幼く見えますが、それだけに邪な想いなど何も持っていないことがよくわかります。

すると階段からまた別の人物が現れました。金髪を結び上げ、えん

じ色のドレスをまとった貴婦人で、数人の侍女を従えています。

その女性を一目見たとたん、セシルは自分からお辞儀をしました。ロムド国の王妃だと、すぐに気がついたのです。四人の魔法使いがまた、深々と頭を下げます。セシルと白の魔法使いは男のお辞儀をしています。王妃もそれを少しも気にしませんでした。見ただけで心の中が暖かくなってくるような、穏やかな笑顔を向けてきます。

「メイのセシル姫ですわね……？ 王妃のメノアです。このたびのオリバンとのご婚約、本当におめでとうございます。私たちも仲良くしてくださいませ」

一国の王妃だというのに少しも偉ぶらないメノアの態度に、セシルはまた驚きました。自国の王妃であるメイ女王を思い出します。自分より目下の者に、こんなふうに親しく話しかけることなど、絶対にありえない女性です。

かたわらに控えていた道化がまた賑やかに話し出しました。「メイの凛々しき王女様、どうぞメノア王妃様やメーレーン様と一緒においでくださいませ。王妃様はかつては敵国だったザカラスの王女、ロムドと戦った後にロムドへお輿入れされた方です。セシル姫様も何かとご心労があたりでしょうが、王妃様の先輩としてのお話を聞けばきつと安心できるでしょう。及ばずながらこのトウガリめも姫様方のおそばで務めさせていただきます。身は道化でも心は騎士。姫様方をお守りして笑わせるためならばたとえ火の中の中」

トウガリの正体は王妃たちを守る間者です。敵に殺されかけたメーレーン王女を救ったこともあります。おどけた口調でまくしたてても、言っていることは真実でした。

セシルはとまどいながら白の魔法使いを振り向き、「王妃様たちと一緒したりして良いのだろうか……？ あなたが叱られたりすることはしないのか？」

彼女たちは準備された客室へ行くよう王から言われたのです。白の

魔法使いは微笑しました。

「お氣遣いになる必要はありません。セシル様のなさりたいようになさればよいのです。ここはロムド城ですから」

自国の城とのあまりの違いに、またとまどう顔になったメイの王女でした。

3

執務室では、ロムド王と重臣たちが、オリバンからの報告を聞き終わったところでした。ロムド王が、ふむ、と言います。

「なるほど、今回のメイでの一件はそのようなことであつたか。世界はまたしても勇者殿たちに救われたのだな……。我が国は、オリバンとセシル姫の婚礼を機に、ジタンでの捕虜を還してメイと同盟を結ぶ。エスタ、ザカラスに続いて三国目のことだ。まったく、勇者殿たちには感謝してもしきれぬ」

すると、銀髪の青年が口を開きました。

「勇者殿たちはただ、ご自分たちの道を進んでいるだけでございます。今回のメイとの同盟で、ロムドを核とした中央大陸の勢力はいっそう強固なものになります。勇者殿たちは、それをご自分たちのしわざとは気がついておられません。それが運命に定められた大きな役目だということにも」

運命に定められた役目？ と執務室の人々は思わず聞き返しました。

「地上に光の軍勢を作り出すことでございます。影の竜は自分の拠り所を求めて、世界中を転々としています。いずれは強大な依り代を見つけ、魔王となってこの世に襲いかかってくるでしょう。どれほど勇

者殿たちが防ごうとしても、それは必ずやってくる運命です。魔王が率いる闇の軍勢と対抗するには、この地上に光の軍勢を作らなければなりません……。勇者殿たちがなさっていることは、世界を光の下にひとつにまとめていく努力です。むろん、勇者殿たちにはそんな意識はまったくありません。ただ闇の敵に苦しめられる人々がいるから、守るために戦わずにはいられないだけです。ですが、その無償の姿が非常に多くの人々を惹きつけ、敵味方を越えてひとつにしていくのです」

それを聞いて、リーンス宰相が言いました。

「宗教都市ミコンからは、先日、新しい大司祭長の名前で協力の申し出がありました。ロムドや勇者殿たちに何事があれば、ミコンの全市民が光の神へ祈りを捧げ、闇の徒を退けるために武僧軍団や聖騎士団を送り出す、というものです。これまでミコンは大国並みの力を持ちながら、どこの国や勢力とも手を結ぶことがありませんでした。それが堂々と連盟を申し出てきたわけです。驚くばかりです」

ウルラ將軍がうなずきました。

「ミコンはユリスナイを主神とする神の都だし、中央大陸には、王や国民がユリスナイを信仰している国が非常にたくさんある。闇と戦うために聖戦を始めるとミコンが言えば、参戦してくる国家はいくつも出てくる。非常に大きな勢力になりますな」

すると、ゴリスが話し出しました。

「フルートたちはこれまで、本当にいろいろな場所へ行った。エスタ、ザカラス、メイといった中央大陸の国々はもちろんのこと、天空の国や海、北の大地のような、大陸とは違う場所にも行って、そこに住むものたちを守ってきた。その結果、人間とドワーフは協力するようになったし、ドワーフとノームは長年の誤解を解いてジタンで一緒に暮らし始めた。二人の海の王も、あいつらによって和解したと聞いてい

る……。世界の国々や種族をひとつにまとめていくのがあいつらの役目なのだと言われれば、なるほどそうかと納得できる気はする」

「ゴリスのことは、どこかひとりごとのようにでした。遠いまなざしで思いだしているのは、シルの町にいた頃の幼いフルートの姿なのかもしれません」。

ユギルはテーブルの占盤を見つめ続けていました。

「勇者殿たちの本当の役目は、闇の竜から世界を守ることそのものです。今は、闇の竜を倒す方法を求めて世界を旅しておられる。それがどのような方法であるのか、わたくしの占いの目にも見えてはまいりません。総ては未来の彼方です。ですが、勇者殿たちが行かれる道には、常に新しい友と味方が生まれ続けます。そうやって結び合わされた人と人、種族と種族、国と国とが、真の敵を知って協力しあうようになるのです。本当に幼く見えるし、優しげな姿をしています。あなた方は確かに真の勇者です。世界をひとつに結び合わせて光の軍勢を作り、その先頭に立って闇と戦う、光の戦士たちなのです」

敵かな占者のことばに、部屋の者たちが納得します。

やがて、口を開いたのはロムド王でした。

「此度、勇者殿たちによって結ばれたのはロムドとメイだった。オリバンもセシル姫と出会うことができた。我々がするべきことは、そうやって勇者殿たちが結んでくれたつながりを、さらに強固なものにしていくことである。いつか必ず来る闇との決戦に備えて」

すると、オリバンは、はっとした顔になりました。少し考えてから言います。

「私は今回、城へ戻ってくることを非常につらく思っておりまして……。彼らは私とセシルを残して旅立ってしまった。私たちが守るべきものは他にあるのだから、と言って。私もれっきとした金の石の勇者の仲間のもりでいました。彼らに置いてきぼりを食わされたような

気がしたのです。ですが、今、父上のことばを聞いて、自分が間違っていたことを知りました。彼らは世界を結んでいく。だが、それをしっかりとつなぎ留め、まとめる存在がなければ、闇と対決するとき力を発揮することはできません。それがこのロムドの役目であり、そのために務めることが、皇太子である私の役目なのでしょう。デビルドラゴンはロムドを要の国と呼んでいた、とフルートたちから聞いたことがありません。それはきつと、こつという意味だったのです」

「おそらくそうであろう」

とロムド王は言いました。

「人にはそれぞれ役目があり力があるものだ。勇者たちには勇者たちの、我々には我々の。異なる力をひとつに寄せ合ったとき、それは、思いも寄らないほど大きな力に変わる。おそらく、闇の竜も倒せるほどのな。要の国とは良い呼び名だ。我がロムドは喜んで要の国となる。そして、勇者殿たちが結び合わせた国や人々をつなぎ続けるために、これからも全力を尽くしていくのだ」

歳をとつても、王の声は、強くはつきりと響きます。執務室の臣下にはいつせいに深く頭を下げました。皇太子のオリバンが、黙って大きくうなずきます。

すると、ユギルがまた静かに言いました。

「セシル様も、そのための大切なお一人でございます。そして、今セシル様をメイへお帰しすれば、姫様のお命がなくなる、と占盤は告げております。ご婚儀まではまだ間がありますが、セシル様にはこのままずっとロムド城に留まっていた必要がありません」

「実に苦勞をしてこられた姫君である。オリバンと似ておる」

とロムド王はしみじみとつぶやき、口調を変えて家臣たちに言いました。

「ユギルの占いだ。セシル様にはこのままロムド城の一員となっても

らおう。そのための手はずを整えるように」

はっ、と重臣たちはまたいつせいに頭を下げました。

リーンス宰相が言います。

「そのためには城で大きな催し事を開かなければなりません。国内に皇太子殿下のお后としてセシル姫を紹介するのです」

オリバンは思わずたじろぎました。

「催し事というのは、ひよっとすると祝宴のことか？」

「さようです。殿下とセシル姫の婚約披露のお祝いでございます。華やかに舞踏会など開くのがよろしいかと」

ロムドの皇太子はさらに困惑した表情になりました。

「セシルはダンスは踊れる。メイで私と踊ったからな。だが、人前にドレス姿で出て、それで人々が納得するかという……。彼女はずつと軍人として育ってきた姫だ。身のこなしも自然とそうなっている」

それを聞いて、全員は先刻のセシルを思い浮かべました。非常に美しい姫です。ドレスを着れば、皇太子の婚約者として少しも恥ずかしくない姿になるでしょうが、男のような口調と態度は、確かにそう簡単には変わらないような気がします。

すると、銀髪の占者が穏やかな微笑を浮かべました。

「大丈夫でございます。この城には、非常に頼もしい味方がおられますので」

とたんに、全員が別のある人物を思い浮かべました。うなずきながらロムド王が言います。

「ラヴィア夫人か。確かに彼女は適任だ」

ロムド城で長い間、ロムド王や王の新しい重臣たちに礼儀作法を教えてきた老婦人です。その道にかけて右に出る者は、この国内にはいませんでした。

「では、さっそくラヴィア夫人においていただきますしょう」

とリーンス宰相が執務室を出て行きます。

全員がなんとなく、ほっと安心する中、オリバンだけは難しい顔を続けていました。ワルラ將軍が話しかけます。

「どうされました、殿下。ラヴィア夫人にお任せすれば、きっと万事うまくいきますぞ。なにしろ、勇者殿をあれほど完璧な貴婦人にした方ですからな」

「札付きの悪ガキも、宮廷一上品な占者に仕立て上げられたしな」

とゴーリスが笑いながら口をはさんで、銀髪の占者から、じろりとにらまれます。

すると、オリバンが言いました。

「婚約披露の宴ということとは、やはり私もそこに出席しなくてはならないのだろうな……。どうにもそういう場所は不得手で、ずつと避けてきたのだが」

一国の皇太子のくせに、集まりごとの嫌いなオリバンでした。重臣たちが呆れて苦笑いすると、ユギルが言いました。

「良い機会です。国中の主だった者たちに、セシル様とご一緒に顔見せなさいませ。殿下は幼少の時分から城にいなかったために、国内にも殿下の顔を知らない者が大勢おります。今まではむしろそれが好都合でしたが、これからはそうはまいません。国の内外に出かけて陛下の代理を務めることも多くなりましょう。国民に皇太子の顔を覚えてもらうことは、大切なことでございます」

「オリバンにも教師をつけねばならぬか。必要なのは、さしずめ社交術の先生だな。社交界に必要な教養を身につけねばならぬだろう」

とロムド王が面白がるように言ったので、オリバンは慥然としました。

「そうおっしゃいますが、父上はお若い時分、社交術の先生についてりなされたのですか？」

「むろんだ。そして、講義は総てすっぱかした」

とんでもない腕白坊主だった王は、そう答えると、声を上げて笑い出しました。

4

セシルの元へラヴィア夫人がやってきたのは、翌日の午後のことでした。

黒っぽいドレスを着て白い髪を頭の上でまとめた、小柄な老女です。顔はしわだらけで背中も丸く、杖をつきながら歩いています。その足取りはしつかりしています。丸い眼鏡の奥からセシルを見上げた目にも輝きがありました。

「初めてお目にかかります、未来の皇太子妃殿下。かつてこの城で礼儀作法の教育係をしていたラヴィアと申します。王女様に城の作法をお教えるよう、陛下からご依頼を受けて参上しました。よろしくお願いたします」

口調は丁寧ですが、声にも強さがあります。思わず深く頭を下げたのはセシルのほうでした。

「オリーブからあなたの話は伺っていました……。私はロムドの作法を知りません。こちらこそ、お世話になります」

そのやりとりに、白の魔法使いが、そっとほえんでいました。彼女は昨日からずっとセシルのそばで警護に当たっています。この男装の王女が、実は非常にきめ細かい心遣いができる女性だということに、女神官は気がついていました。今も、九十歳という高齢のラヴィア夫人に、自分から敬意を払っています。

老婦人のほうも、そんなセシルに、にっこりしました。

「王女様をセシル様とお呼びするように、と陛下から言われておりますので、失礼ながら、そのようにさせていただきます。私のことはラヴィア夫人とお呼びください」

「いいえ、先生と呼ばせていただきます。ご教授のほどをどうぞよろしく願っています、先生」

セシルが再び丁寧な頭を下げました。片手を胸に当てた男性のお辞儀ですが、ラヴィア夫人はそれを怒りませんでした。微笑する顔のまま、穏やかに言います。

「物事には順序というものがあります。セシル様は未来のロムド王妃となられるお方。まずは、このロムド王室について話して聞かせて差しあげましょう。王妃となるためには大切なことです……」

二人の女性が部屋のソファへ移動していくのを見て、白の魔法使いは一礼して姿を消しました。次の瞬間には部屋の外の通路に現れます。礼儀作法の稽古の邪魔にならないよう、席を外したのです。それでもセシルを守ってドアの外に立ち続けます。四大魔法使いのリーダー自らが見張り番なので、さすがに城の衛兵さえ遠慮して、そばには誰も近づきません。

すると、急に声がありました。

「ちょっとよろしいですか、白？」

何もなかった空間から杖を握った大男が姿を現しました。武僧の青の魔法使いです。

「どうした？」

と白の魔法使いは尋ねました。青の魔法使いは、本当ならば城の守りについているはずの時間です。

「城の内外を見張っているうちに、ちょっと気になるやりとりを小耳にはさみましてな。相談しようと思って、赤に見張りを交代してもらってきました」

「気になるやりとり?」

「城のケールカ侯爵の部屋でよからぬ相談事です。敵国の王女をロムドの未来の王妃にするなどんでもない、と言っている。陛下が婚約披露の宴を貴族たちに知らせましたからな。その席でセシル様に恥をかかせて、セシル様がロムド城にはふさわしくないと知らせる計画のようです」

白の魔法使いは顔をしかめました。

「陰險な計画だな。いかにも貴族たちが考えつきそうなことだ。トウガリ殿はどうしている?」

「こういう陰謀を調べ上げて証拠をつかむのは、間者のトウガリが得意とするところです。」

「昼から王妃様とメーレン様が芝居観劇に出かけたので、それに同行しています。大貴族の中の不満分子がまた動き出しそうだ、と心配されていましたが、案の定ですな」

ふむ、と白の魔法使いは考え込みました。

「わかった。ユギル殿にお知らせしてこよう。ここの守りを頼むぞ」と青の魔法使いに後を任せて、王の執務室へ飛びます。

白の魔法使いからの報告を聞いて、ユギルが言いました。

「昨夜、陛下が王都中の貴族たちに婚約披露の知らせを出して以来、城の内外で非常に多様な動きが起きております。メイの王女が皇太子妃になることを不満に思う動きも大きく、あちこちで渦を巻くように力を集めているのです。ケールカ侯爵の企てはそのひとつです。セシル様のお命を狙うのであれば、こちらも手を打てますが、むしろこういう嫌がらせの類は、直接の危害ではないだけに取り締まりがしにくい。やっかいでございますね」

「ケールカ侯爵には妙齢の令嬢がいます。皇太子殿下のお后にする計画でいたのでしょうか」

とリーンズ宰相が言います。この時、執務室にいたのはロムド王と宰相とユギル、それに白の魔法使いの四人だけでした。オリバンがこの場に居合わせたら、「いつたいたんだそれは?」と困惑したことでしよう。

「セシル姫の誇りを汚させるわけにはいかぬ。どうするのが良い?」とロムド王に尋ねられて、銀髪の占者は占盤を眺めました。

「ケールカ侯爵だけでなく、セシル様をロムドから追放しようとする動きは、非常に多くの場所で起きております。十四年前、メノア様がこの国の王妃に嫁いでこられたときと同じです。時間がたつほど危険は大きくなっていく、と占盤は言っております。婚礼披露の宴をできるだけ早めるのがよろしいかと存じます」

「どの程度に?」

とロムド王がまた尋ねます。

「あと一週間後に」

「一週間後!」

と思わず大声を上げたのはリーンズ宰相でした。頭の中で素早く段取りを計算して、思わず目を回しそうになります。

「そ、それではろくな準備が……招待される方でも、あまり急なことで支度が充分に間に合わないことでしょうか!」

「愚かなことを言うな、リーンズ。それこそユギルが狙っていることだぞ」

と王がたしなめました。貴族たちが祝宴に出席する準備に大わらわになるからこそ、よからぬ企てをする暇がなくなるのです。

けれども、白の魔法使いは心配そうな顔をしました。

「貴族たちはそれでよろしいでしょうか。ですが、わずか一週間で、セシル様のほうの準備が間に合うでしょうか? ラヴィア夫人との稽古は先ほど始まったばかりなのですが」

しかも、その稽古は王室の歴史を教えるところから始まっているの

です。
「大丈夫です。なにしろ、あのラヴィア夫人が先生でございますから」
そう言って、かつて貧民街の悪童だった占者は、貴族のように上品に笑って見せました。

5

皇太子の婚約披露の日は、あつという間にやって来ました。
夕刻から続々と招待客が到着して、城の大ホールに入っていきます。
何百人という貴族の男女で、全員が金のかかった立派な格好をしています。城から正式な招待状が届いてから祝宴の当日まで、わずか一週間しかありませんでした。誰もが準備に血まなこになり、やっと間に合った真新しい服に身を包んでやって来たのです。この一週間、王都とその近辺では、仕立屋という仕立屋が徹夜で仕事に追われたのでした。

会場のホールでは招待客が賑やかに話し合っていました。話題の中心は、なんとと言っても皇太子の婚約者のことです。先日ロムドに攻め込んだメイの王女を皇太子妃にするというので、誰もが不満顔でした。
「まったく、王といい皇太子といい、王室は敵国の姫がお好きだな！
敵をロムドに引き入れて無事ですむはずがないというのに。何を考えておられるのだ」
「実際にはメイの王女は賠償金なんだよ。メイがロムドの属国になる証に贈られてきたんだ。后と言っても、ただの飾り人形だ」
「だが、十四年前そうやって嫁いできたメノア様は、今は正真正銘の王妃だぞ？」

「メノア様はザカラスの王女だったじゃないか。持参金だって相当なものだったと聞いている。貧乏で野蛮なメイとは全然話が違ふさ」
「私はメイの王女が城に到着したところを見かけたが、なんと、男の格好をして腰には剣まで下げていたぞ。メイが野蛮だという意見には実に賛成だな」
「さしずめ獣の皮の服でも着て登場するんじゃないのか、メイの王女は」

意地の悪い笑い声が、どつと上がります。

華やかな格好をした貴族の娘たちは、母親と話をしていました。

「ねえ、お母様、皇太子殿下ってどんなお方なの？ 今まで話にも聞いたことがなかったのに」

「私もよく知りませんよ。なんでも、ずっと辺境部隊にいらしたのですつて。とても乱暴で怖い方だとお父様が言っていたわ」

「まあやだ。そんな方が未来のロムド王になるの？ ねえ、お母様、私もう家に帰りたいわ」

「私もですよ。陛下のおことはがすんでご挨拶が終わったら、さつさと屋敷に戻りましょう。こんな急支度な宴は面白くもないでしょうからね」
そんな感じの会話があちらこちらでやりとりされています。

会場の隅にひっそりと立っていた青の魔法使いが、別の片隅にいた深緑の魔法使いに心で話しかけました。
「やれやれ、ものすごい言われようですな、セシル様も皇太子殿下も。

会場で、悪口の洪水ですぞ」

「好きなように言わせておけばよからう。どうせ貴族どもには何も見えとらん。連中の目はただの節穴じゃからな」

と深緑の魔法使いが心話で答えます。周囲に魔法を張り巡らしているので、そこに彼らがいることに、招待客はまったく気がついていま

せん。自分たちの会話が一言もささず聞かれているということにも。

「ガ、ブ、カ？」

と赤の魔法使いがまた別の片隅から話しかけてきました。やはり声には出さない心話を使っています。

「セシル様ですか？ 白が言うには、見た目はまったく心配がないという話でしたがな。問題は中身のほうだ。この意地悪な連中に尻尾をつかまれば、あつという間につるし上げられますぞ」

と青の魔法使いが心配そうに答えます。

そこへ会場にラッパの音が鳴り響きました。王と王妃の入場の合図です。入り口という入り口から綺麗な服を着た給仕や城の家来が入ってきて、招待客へ丁寧にお辞儀をします。客はいっせいに話をやめ、奥の大階段に注目しました。分厚い絨毯を敷き詰めた階段を、宝冠をかぶったロムド王が王妃の手を取って下りてきます。王はロムドを象徴する緑と銀の服に白テンのマントという衣装、王妃は初夏らしい薄緑色のドレスに、銀の刺繍をした白い薄絹のマントのおおつています。そのすぐ後ろを下りてくるのはメーレーン王女です。今日もバラ色のドレスを着ていますが、プラチナブロンドの巻き毛を結い上げていたので、いつもより少し大人びて見えます。

王の一家にうやうやしく頭を下げた招待客の前へ、王たちを追い越して階段を駆け下りてきた人物がいました。赤と緑と青の服を着た、背高のつぼの道化です。大げさな身振りで客に向かってお辞儀を繰り返して、笑うような化粧をした顔をあちこちへ向けます。その滑稽な姿に客人の間から笑いが洩れると、道化が声を上げました。

「本日は皇太子殿下とメイのセシル王女様の婚約披露宴にお集まりいただき、まことにありがとうございます！ 季節は折しも緑麗しい季節。若いお二人のめでたい宴にふさわしゅうございます！」

派手に感動しながら道化が両手を広げると、とたんに何もなかった手の先から花が飛び出しました。手を振るたびに花が次々湧き出してくるので、道化は驚いた顔になり、それでも花が尽きないので笑いながらあたりに振りまき始めました。

「どうやら花の女神も殿下と王女のご婚約を祝っておいでなのでしょう。ごさいます！ これはめでたい！ いやめでたい！」

道化は踊るような足取りで客の間に飛び込んでいくと、さらに客へ花をまき散らしました。ついさっきまで婚約に文句を言っていた客人たちが、思わず声を上げて笑い出します。

「ほう、さすがはトウガリ殿じゃな」

と深緑の魔法使いが感心しました。道化がやって見せているのはただの小品ですが、色とりどりの花吹雪と共に、不満に充ちた会場が一気に和やかになっていました。王や王妃、メーレーン王女も笑顔で会場の正面の席に着きます。

すると、どこからともなく黒ずくめの剣士が現れて、王の一家を守るようにそばに立ちました。ゴリスです。めでたい席でも剣を携帯することを許されています。

正面の入り口が一度扉を閉じ、そこから案内係が入ってきて会場へ呼びかけました。

「オリバン皇太子殿下のご入場です！」

会場の楽団が音楽を奏で始めます。人々がいっせいに入り口に注目する中、扉が再び大きく開かれると、そこに皇太子が立っていました。黒と銀の服に身を包み、緑のマントをはおった、大柄な青年です。

とたんに貴族や貴婦人は息を飲み、貴族の娘たちが歓声を上げました。皇太子は見るからに立派で美しい容姿をしていました。正面の玉座に座る王や王妃に向かって一礼する姿にも、王族の気品と威厳が漂います。

「お母様、お母様、あれが皇太子殿下なの！？ とても乱暴で怖い方だなんて嘘ばかり！ 信じられないくらい素敵なお方じゃないの！」
「私のせいじゃありませんよ。私はおまえのお父様からそう聞いていたんですからね。まあ、本当になんて立派な方だったんでしょう。」

母と娘が興奮しながらそんな会話をしたわらで、貴族たちも頭を寄せ合ってひそひそ話をしていました。

「あれが皇太子殿下か？ 信じられん。前に見たときと、ずいぶん感じが違うじゃないか」

「ああ。以前はいつも不機嫌そうで、しょっちゅう周囲にどなりちらしていたんだ。父君の国王陛下とも、臣下の面前でおおっぴらにやり合っていたというのに」

「落ちつきと威厳のある皇太子だ。まるでもう若い王のようだな。先のロムド十三世によく似ておられる」

誰もが、威風堂々としたオリバンの姿を、驚き呆気にとられて眺めています。

すると、オリバンの後ろでまた扉が閉じました。案内係が再び声を上げます。

「皇太子殿下の婚約者、メイの王女セシル様のご入場です！」

とたんに、会場の招待客がざわめきました。セシルという男名にとまどったのです。ところが、扉がまた開いたとたん、そんな声は潮が引くように消えていきました。誰もがぼかんと口を開けて入り口に立つ人物を見つめます。

そこにいたのは、目が覚めるように美しい女性でした。長い金の髪を結び上げ、花嫁のような純白のドレスを着ています。大きく開いた襟ぐりの後ろには薄絹が直接縫いつけられていて、マントが長いベールのように後ろの床に流れています。ロムドでは見たことがなかったデザインの服に、貴婦人や貴族の娘たちが目を丸くします。

オリバンが入り口へ歩いて行って、王女の手を取りました。非常に大柄な皇太子ですが、王女のほうもそれに見劣りしないだけの長身です。さらにとても女性らしい体型をしているので、二人並ぶと非の打ち所がない一対になります。黒と白の美男美女です。王女のドレスや薄絹には銀の刺繍がほどこされ、結い上げた髪には緑の寶石が飾られていて、オリバンの衣装やマントとさりげなくお揃いになっていました。

会場中の人々が声もなく二人に見とれる中、リーンス宰相が身をかがめて、かたわらの女性にささやきました。

「こんな短期間に、よくあれだけの衣装をセシル様に準備されました。さすがはレイヤー又侍女長です」

すると、ふくよかな体型をした侍女長は微笑を返しました。

「いいえ、あれはセシル様ご自分の国からお持ちになったドレスです。セシル様の母君がたくさんの衣装を荷物に入れてよこされたので、その中から殿下のお衣装と一番釣り合いの取れるものを選んだのです。こちらで準備したのは、あの髪飾りだけです。ご覧なさいな、宰相。女性たちのあの熱いまなざしを。断言しますが、あのメイ風のドレスは、これからロムドの社交界で大流行しますよ」

「それは悪くない話です」
と宰相も笑いながら答えて、国王一家の前に進んでいく皇太子とメイの王女を見守り続けました。

玉座の前で、セシルはドレスの裾を広げて深く一礼しました。まるで一羽の白鳥が翼を広げたような優美さが漂います。会場中から、ほうつと溜息が上がります。セシルは、完璧なロムド式の女性のお辞儀をして見せたのでした。

誰もがメイの王女に見とれている会場に、いつの間にか白の魔法使いが立っていました。王女と一緒に大広間に入ってきたのですが、周囲に魔法を張り巡らしていたので、誰にも見えなかったのです。仲間の四大魔法使いたちだけが気がついて、口々に心話で話しかけてきました。

「いやはや、これは驚きましたな。実に見事な王女ぶりだ」

「男の格好をしていても中身が女らしいことは見えとつたが、それにしても大した変身ぶりじゃな。これなら誰にも文句のつけようがないのう」

「スガ、ラヴィア」

「いや、そうではない。ラヴィア夫人はセシル様に礼儀の稽古をしておられないのだ」

と白の魔法使いが答えました。とまどうような表情をしています。稽古をしていない？ と仲間たちはいつせいに聞き返しました。

「そうだ……。毎日セシル様と部屋で話をしていただけで、身のふるまい方の稽古もことばづかいの練習も、なにもなさらなかったのだ。これでどうなるのだろう、と心配していたのだが、当日になってみたら、こうだ。ラヴィア夫人こそ本当は魔法使いだったのではないかとさつきから疑っていたところだ」

「それはありえない」

「そう。ラヴィア夫人は普通のご婦人だ」

「ダ？」

魔法使いたちが驚きながらセシルを見つめます。メイの王女は、このうえなく上品な様子で、ロムド国王に挨拶を述べています。

「未来の父君様、このたびはわたくしたちのためにこのように盛大な宴を開いてくださって、本当にありがとうございます。これほどたくさんの皆様方に祝福してただけて、わたくしは本当に嬉しゅうございます」

「ことばづかいも完璧な女性口調です。かたわらに立つオリバンが、そんなセシルを目を丸くして見ていました。」

大広間の片隅で、灰色の長衣を着てフードをまぶかにかぶった男が、隣の老婦人に話しかけていました。

「さすがは先生でいらっしゃいます。セシル様は完璧な皇太子妃になられましたね」

占者のユギルとラヴィア夫人です。すると、夫人が答えました。

「私は何もしていませんよ、ユギル。ただ、毎日セシル様にロムドについて話して差しあげただけです。ロムドがどんな歴史を経て今のロムド国になったのか、今の国王陛下が何を目ざしておられるのか、そのためにどんな出来事が国の内外で起きたのか……。あの方は、もともと王女として育てられてきた方です。ただ軍人という役割と、祖国に疎まれていた反発から、男のようにふるまっていただけなのです。だから、私が改めてお教えするような礼儀作法は何もありません。私がお教えしたのは、ロムド式のお辞儀のしかただけです。あとは踊りの先生を呼んでロムドのダンスをお教えしましたが、それもあつという間に覚えてしまわれました」

ユギルは驚いて思わず絶句しました。

「さすがの一番占者にもセシル様の正体は見抜けませんでしたか？ まだまだですね」

とラヴィア夫人は笑い、フードの影で少年のように口を尖らせたユギルへ、穏やかに続けました。

「セシル様は大変賢い方です。まだ若いのに、さまざまな苦勞もしてこられている。皇太子殿下が幼少から命を狙われて辺境部隊に身を寄せていた話をする、とても驚いて、たちまち自分のすべきことに気がつかれましたよ。未来のロムド王妃らしくすることが、自分のためだけでなく、皇太子殿下や国王陛下にとってもロムド国にとっても、非常に重要なのだということにね。だから、ああして、完璧な皇太子妃としてふるまっているのです」

そして、夫人はセシルへ目を向けました。未来の皇太子妃は、信じられないほど美しく上品に見えています。

ユギルは丁寧に頭を下げました。

「やはり先生は一流の教師であられます。先生にセシル様をお預けして正解でした」

「あなたのお力がそれを告げたのでしょ、ユギル。あなたの先読みの力のおかげですよ。とはいえ」

夫人はごく静かな声で話していましたが、急にいつそう低い声になりました。

「セシル様の態度は完璧すぎる気がしますね。皇太子妃であろうとするあまり、ご自分らしさをすっかりなくしているようにも見えます」

自分らしさ？ とユギルは聞き返しました。ラヴィア夫人は、丸い眼鏡の奥から気がかりそうに王女を見つめていました……。

国王の挨拶が終わると、宮廷楽士たちの演奏が始まりました。舞踏会の開始です。貴族と貴婦人が二人一組になっていきます。

オリバンもセシルの手を取って大広間の中央に進み出ました。ロムドの舞曲に合わせて踊り始めます。ターンをするたびにセシルの薄絹とオリバンのマントがひるがえり、銀の刺繍や緑の宝石が光ります。

その見事な眺めに、また会場の人々が見とれます。踊りながらオリバンがセシルに話しかけました。

「大したものだな。あなたにここまで完璧な王女ができるとは思っていなかったぞ」

「よく化したものだ、と言いたいのだろう？」

とセシルが軽くにらみ返しました。そんな表情や口調は、いつものセシルと変わりません。オリバンは笑いました。

「いや、とても美しい。だが、男の姿もあなたらしくて良いと思う。そのことばづかいもな。なんだかほっとするぞ」

「馬鹿なことを言うな。后が男の格好をして男のようにふるまっていたら、皆から笑われてしまうのだぞ。皇室そのものが国民の笑いにされてしまう。だから、今後私はもう男の格好をしないことに決めたのだ」

会場には軽快な音楽が流れているので、彼女が男言葉で話しているのを聞きつける人はいません。オリバンは驚き、少し考えてから言いました。

「何故それではいかなのだ？ こういう公式の場ではともかく、普段まで無理に女の格好をしている必要はないだろう。男の格好をしていようが、女の格好をしていようが、あなたはあなただ。その中身も価値も、外見で変わることはない」

その生真面目な口調に、セシルは思わず苦笑いしました。白い羽根のように薄絹をひるがえしてターンをし、すぐに反対側へまたターンをしてから話し続けます。

「男の格好をした皇太子妃が王宮を闊歩する（かっほ）というのか？ 腰に剣を下げて？ そんな話は聞いたこともない。いくらロムド城が自由な気風でも、それはありえないことだ」

「そうだろうか？ 父上たちは気にせんような気がするが」

オリバンはどこまでも真面目に言い続けます。セシルがそれに答えようとしたとき、曲が終わりました。踊り終わった人々が会場の端の方へ戻っていきます。セシルもオリバンと戻りながら言いました。

「咽が渴きました。飲み物を持ってきてくださいませんか？」

また完璧な女口調になっています。オリバンはなんとも言えない表情になると、黙ったまま、飲み物の盆を持つ家臣のほうへと歩いていききました。

すると、それと入れ替わりのように、数人の貴族たちがやってきました。セシルへ話しかけてきます。

「これは麗しのメイの王女様。ようこそおいでくださいました。ロムドはいかがでしょうか。小国メイとは違いますでしょうか」

礼儀正しく聞こえることばの陰から、相手の国を馬鹿にする気持ちがのぞきます。セシルはドレスの裾を引き寄せ、自分を取り囲む貴族たちを見回しました。警戒と不快感が顔に出ないように注意しながら答えます。

「ええ、初めての場所ですので、いろいろなものを大変興味深く拝見していますわ」

ゴリスがそんな様子に気がついていました。セシルに話しかけているのは、例のケール力侯爵とその一派です。セシルが皇太子妃にふさわしくないことを証明しようと、セシルの揚げ足取りに来たのです。そつと玉座の王に尋ねます。

「いかがなさいますか、陛下？」
「トウガリが向かった。様子を見よう」

と、見て見ぬふりをしながら王が答えます。

ケール力侯爵がセシルに話しかけ続けていました。うわべだけにはこやかに、こんなことを聞いてきます。

「ときに、未来の皇太子妃殿下はお芝居は好きでしょうか？ 音楽は？ このディーラでは一流の芝居や演奏会が毎日のように開かれていますので、ぜひ感想をお聞きたいところです。今話題のグラップの『騎士の涙』などは、未来の妃殿下もきつとご覧になっていますでしょ

うね」

彼らの周囲にはいつの間にか人垣ができていました。貴族や貴婦人たちが、この美しい王女を眺めに来たのです。彼女がなんと答えるのか興味津々でいます。

「グラップの『騎士の涙』ですか……？」

とセシルが繰り返しました。とまどった顔をしています。ケール力侯爵たちは、獲物が網にかかったのを感じて、にやりとしました。小国メイにはろくな文化がないと踏んで、わざと最新の芸術の話題をふっかけているのです。

そこへ道化がやって来ました。大げさな身振りと声で話しかけてきます。

「これはこれは貴族の皆様方、セシル様を大歓迎でございますね。ですが、その質問は姫様にはあまりに失礼でございます。姫様は今日のご準備ですと忙しくなさっていて、芝居見物にも行くことはできませんでした。『騎士の涙』ならばこのトウガリめもつい先日観劇しましたが、あれは」

「黙らないか、道化！」
とケール力侯爵がびしゃりと言いました。

「私は未来の妃殿下に聞いているのだ。卑しいもののくせに口をはさむな！ わきましろ！」

高慢な口調と共に怒りが伝わってきます。逆らえば騒ぎになると感じて、トウガリは急いでお辞儀をして引き下がりました。心配そうに王女を見守りますが、どうすることもできません。

『騎士の涙』……」

とセシルはまだ困惑していました。ケール力侯爵がまた言います。「どうなさいましたか、王女様？ まさか中央大陸に知れ渡った名作をご存じないでも？」

そこへ、飲み物を手にオリバンが戻ってきました。何が起きている

のかすぐに察しますが、オリバンも芝居などはまったく知りません。助け船を出せなくて困惑します。

すると、セシルが丁寧な口調で言いました。

「申し訳ありません。わたくしはグルップの『騎士の涙』という作品を存じ上げませんわ。グルップの『騎士の涙』ならば知っていますが。それとも、ロムドではグルップはグラップと呼ばれているのでしょうか？」

や、と侯爵はことばに詰まりました。国による発音の違いではありません。覚え違いをしていたのです。たちまち赤くなって、汗をかきながら言い続けます。

「ちよ、ちよつと言い間違えてしまったようすな……。そのグルップは見たことがありませんか？」

「ええ、メイの王都のジュカで。騎士と貴婦人の悲しい恋物語で、グルップの代表作と言われていますわね。ですが、わたくしはグルップの晩年の作品の『しだれ柳』のほうが入っております。何があっても王に忠誠を示し続ける騎士の姿に胸を打たれました」

ケールカ侯爵たちは何も言えなくなりました。その作品はロムドではまだ上演されたことがなかったのです。

すると、別の貴族が話しかけてきました。

「で、では、音楽はいかがでしょう？　ロムドでは貴族の子女は誰もが音楽をたしなみます。未来の皇太子妃も何か楽器をお弾きになりますか？」

「リユートを少し。いたずらでクラブサンを弾くこともありますわ。ミュウワロスの小品集は特に好きです」

とたんに、集まった貴族たちの間から驚嘆の声が上がりました。ミュウワロスのリユート小品集は演奏がとても難しいことで有名だったので。

王女の答えは完璧でした。ケールカ侯爵たちは王女に恥をかかせるどころか、自分たちのほうが恥をかく形になって、すごすご引き下がりました。それきりもう王女には近寄りません。

オリバンは人から離れた場所へセシルを連れ出すと、飲み物を手渡して言いました。

「驚いたな。あなたがあれほど芝居や音楽に詳しいとは思わなかった。私にはさっぱりわからない話ばかりだ」

セシルはにっこりしました。芸術に疎いオリバンを馬鹿にすることもなく言います。

「あなたはずつと辺境部隊にいたからだ。私は王都に近いナージャにいて、しょっちゅう王都と行き来をしていたし、なんと言っても、母上の趣味につき合わされたからな。母上の話し相手をしていれば、嫌でもこういうことには詳しくなる」

「大したものだ」

とオリバンがまた感心します。

玉座ではロムド王がうなずき、四大魔法使いやトウガリも、それぞれ場所で安堵していました。もうメイの王女に難癖をつけようとする者はありません。

ところがその時、突然大きな声が広間に響き渡りました。

「皆様、お逃げください！　敵です　！」

背の高い男が叫びながら灰色のフードをはずしていました。とたんに銀の髪の輝きが人々の目を打ちます。占者ユギルです。

彼が指さす先を見て、人々は息を飲みました。大広間の中央に、何か姿を現していました。たちまちふくれあがって、天井から下がるシャンデリアに届くほど巨大になります。

それは蛇のような鼻と長い牙の、醜い象の怪物でした。

「なんだ、あれは!?!」

と人々は驚愕しました。こともあろうに、ロムド城の大広間に巨大な怪物が現れたのです。大勢の招待客が集まっていると真ん中です。

怪物は二本足で立っていました。長く太い鼻と巨大な牙は象によく似ていますが、象よりはるかに大きく、天井に届くほどの背丈があります。と、その頭がシャンデリアにぶつかりました。音を立ててシャンデリアが壊れ、火のついた蝋燭やガラスの破片が降ってきます。人々は我に返りました。悲鳴を上げて会場から逃げ出します。

ロムド王は玉座から立ち上がりました。顔色を変えて命じます。
「皆を守るのだ! 衛兵! 四大魔法使い!」

王の前にゴーリスが飛び出しました。剣を抜いて言います。
「陛下、この場からお逃げください! 早く!」

道化の姿のトウガリは、王妃や王女を抱えるようにして大階段へ急がせています。

四大魔法使いも会場に姿を現しました。

「信じられませんな! 出てくる直前まで何も感じませんでしたぞ!」
「いきなりどこから入ってきたんじゃ。幽霊のように現れおつて。城の守りを抜けてくるとは、とんでもない奴じゃ」

「ウダ、ゾ! ナイ!」

「そうだ、象の怪物だ! 青、抑え込め! 赤は招待客の避難! 深緑と私であいつを倒す!」

「承知!」

白の魔法使いの指示に他の三人がいつせいに答え、自分の杖を握り直しました。とたんに巨大な怪物の動きが止まります。武僧の魔法使いが顔を真っ赤にして杖を突きつけていました。将棋倒しになりかけた客たちが、ふわりと見えない力に受け止められ、出口へとじゅんぐりに送られていきます。その間に白と深緑の魔法使いが怪物へ走りま

す。

ラヴィア夫人が占者の青年を叱りつけていました。
「これほどの怪物に、何故気がつかなかったのです! 一番占者のはずのあなたが!?!」

ユギルは青ざめた顔で怪物を見上げていました。
「直前までまったく何も感じませんでした。いきなりやってきたのです。戦闘中でもなければ、こんなことはめったに」

言いかけてユギルは唇をかみました。この状況では、何を言っても言い訳にしかありません。駆けつけてきたリーンス宰相やレイー又侍女長にラヴィア夫人を託して、彼らが避難していく姿を見送ります。

すると、どこからか、うふふっ、という声が聞こえてきました。女の子のような笑い方ですが、若い男の声です。

「みんな、驚いてる驚いてる。びっくり訪問大成功かなあ。うふふふ……」

それは、オリバンにはあまりにお馴染みの声でした。思わず大声を上げます。

「ランジユール!! 何故貴様がここにいるのだ!?!」

動かなくなつた象の頭上に一人の人物が乗っていました。赤い長い上着を着た、細身の青年です。高い場所から人々を見下ろしてにやにや笑っています。その顔も姿も半ば透き通っています。この青年は幽霊なのです。

「はあい、愛しい皇太子くん、お久しぶりい。元気だったあ?」

と投げキッスを送ってきます。

オリバンは思いきり顔をしかめてどなり返しました。

「何故、貴様がここにいと聞いているのだ！ どうやって城に入り込んできた!?」

「ボクは幽霊だよ。どこに出入りするの自由自在さ。ボクはこの世のものじゃないから、名高い占者だってボクのすることは先読みできないもんねえ」

そういうことが、とユギルは歯ざしりしました。彼はこの世のものを象徴の姿で見ているが、幽霊は象徴を持たないので占いの場に現れてきません。しかも、このランジュールは魔獣使いです。城に入り込んだところで魔獣を呼び出したのに違いありませんでした。

「皇太子くんが婚約したって噂を聞いたんだよねえ。ボクってものがありながらさあ、あんまりじゃない？ だから、婚約者の顔を見に来ただけ」

何も知らない者が聞いたら思いきり誤解しそつなことを言いながら、ランジュールは横目でセシルを見ました。

「そおつかあ。キミが皇太子くんの婚約者だったんだねえ、メイの王女様。そう言えば、メイにいた頃から妬けるくらい仲良かったもんねえ。ふうん」

糸のように細い目が、きらりと剣呑けんおんに光りました。ユギルが叫びます。

「お逃げください、セシル様、殿下！ 殺されます！」

とつさにオリバンはセシルを背中にかばいました。二人とも祝宴の衣装なので武器は何もありません。

すると、いきなり、うおっという声が上がりました。青の魔法使いが象の怪物を抑えきれなくなって跳ね飛ばされたのです。また自由になった怪物が、長い鼻をオリバンとセシルへ振り下ろします。

その前に白の魔法使いが飛び出しました。杖を掲げて鼻を受け止め、声を上げます。

「早くお逃げください！ この場は我々が！」

パオオオ、と象の怪物がほえました。巨大な足を踏み鳴らすと、城の大広間が揺れに揺れ、天井のシャンデリアが今にも落ちそうなほど動きます。

深緑の魔法使いが杖を突きつけました。象へ魔法攻撃を繰り出そうとします。

ところが、そんな老人にいきなり飛びかかってきたものがありました。たくさんの白ウサギです。二本の角を生やし、牙を持ち、大きな赤い一つ目をしていきます。牙にかまれたとたん老人がよろめきました。一つ目ウサギは毒を持っていたのです。

「深緑！」

「せ！」

青の魔法使いと赤の魔法使いは駆けつけようとしたが、ウサギが人々にも襲いかかるので、それを防ぐのに手一杯になりました。大広間に悲鳴と恐怖の音が響き渡ります。

「うふふ、そつそう。祝宴は思いつきり賑やかにいかなくちやねえ」

一つ目ウサギを呼び出したランジュールが、上機嫌で言います。

すると、急にセシルが動きました。オリバンの背中の陰から飛び出し、ウサギの群れの前に立って叫びます。

「下がれ!!!」

とたんにウサギたちがいつせいに飛びのきました。ざーっと音を立てながら後ずさり、大広間の一カ所に集まって、キイキイと怒ってわめきます。

それを見据えてセシルはまた言いました。

「黙れ！ 誰にも手出しは許さない！ ここから立ち去れ！」

強い声でした。口調もいつもの男言葉に戻っています。ウサギたちの一つ目に恐れの色が浮かびました。白い毛皮の体を震わせ、さらに一カ所に集まると、あつという間に姿を消してしまいます。

「ああ、またあ！」

ランジュールが象の上から声を上げました。

「キミ、やっぱり魔獣使いだね、お姫様！ せっかく集めた毒ウサギたちを逃がさないでよお！ そんなことするなら、こつしちゃうからね！」

象の怪物が鼻を振り回すと、白の魔法使いが跳ね飛ばされて床に叩きつけられました。象の怪物は四大魔法使いにも抑えきれないほど力が強かったのです。

「いかん！」

青の魔法使いが飛び出し、セシルを踏みつぶそうとした象の足を魔法で止めました。女神官が床の上から叫びます。

「深緑！ 怪物の正体を見抜け！」

「承知じゃ」

深緑の魔法使いはウサギの毒を自分で消していました。また杖を突きつけて、鋭くにらみます。

「正体を見せんか、象の怪」

その目の前に今度は男の顔をした鳥が現れました。牙をむいてギャアアと鳴きます。人面鳥です。視界をさえぎられて、深緑は見破りの魔法が使えなくなりました。魔法を繰り出した青と赤の魔法使いが、人面鳥に攻撃を跳ね返されて驚きます。

ランジュールが楽しそうに言いました。

「無駄だよお。これは魔法使いのお嬢ちゃん対策に捕まえた特別な魔獣だからね。魔法は全然効かないのさあ」

人面鳥が魔法使いの老人を爪でひっかき、大きな翼で打ち倒して舞

い上がりました。象の怪物の上にいるランジュールへ飛んでいきます。「そうそう。おいで、ジンちゃん。強化してあげるからさあ」

幽霊の青年がふわりと浮き上がり、やって来た人面鳥の中に飛び込みました。たちまちその顔がランジュールの顔に変わります。

「さあ、これでメイのお姫様にはジンちゃんを追い返せなくなったよ。なにしろ、ボクと一緒にいるんだからねえ。ゾーちゃんは思いっきり暴れていいよお。ボクをコケにした皇太子くんも、他の人間たちも、大広間ごと押しつぶしちゃっていいからさあ」

うふふふふ、と危険に笑いながら、人面鳥になったランジュールはまた舞い上がりました。一方、象の怪物は命じられたとおり大暴れを始めていました。長い鼻を振り回してシャンテリアや壁や天井を壊し、地響きを立てて玉座に向かいます。そこにはロムド王がいました。避難を勧められても、大広間に踏みとどまっていたのです。

王を守るゴーリスが鼻の一撃で吹き飛びました。再び振り上げられた鼻が、今度は王を叩きのめそうとします。

すると、そこに細身の青年が飛び込んできました。鼻に背中を直撃されてその場に崩れます。長い銀の髪がきらめきながら舞い落ちます。「ユギル！！」

ロムド王とオリバンは同時に声を上げました。占者の青年は逃げ切れなかった王を自分の体でかばったのです。床に倒れて動かなくなります。

オリバンはとっさに駆け出しました。床に落ちていたゴーリスの剣を拾い上げると、怪物に切りつけます。巨大な足から血が噴き出し、バオオオ、と象が叫びます。

その瞬間、ランジュールの歓声が響きました。

「離れたね、皇太子くん！ メイの王女様の命はいただいたよお！！」

メイの王女の命はいただいたよ、というランジュールの声に、会場中の誰もが、ぎょっとしました。白いドレスを着て金髪を結い上げた王女は、たった一人で立っていました。そこへ人面鳥になったランジュールが急降下していきます。

「セシル！」

オリバンが引き返しますが間に合いません。魔法使いたちは杖を向けましたが、魔法はすべて跳ね返されます。人面鳥の爪と牙がひらめいて王女を引き裂こうとします。

その瞬間、王女の目の前に突然大きな獣が姿を現しました。見上げるような灰色の狐です。

「わつとつとお！」

狐にかまれそうになって、ランジュールはまた上昇してきました。

天井の近くで羽ばたきながら言います。

「あれえ。それ、ロダの管狐じゃないかあ。どうしてこんなところにいるのさあ？」

その間にオリバンがセシルに駆け寄っていました。セシルをかばって剣を構え、大狐を見上げます。

「管狐を繰り出したのか。いつの間に連れてきていたのだ？」

「いや、勝手についてきた。今も呼んでもいないのに助けてくれたんだ」

答えるセシルのドレスの帯には、細い笛のような銀の筒が揺れていました。魔獣の管狐はこの中に棲みついているのですが、セシルがど

んな服に着替えても、いつの間にかその腰に筒が現れているのです。うぶん、とランジュールが笑って、人面鳥から半分姿を現しました。「ちょうどいいやあ。王女様の命令なんか聞いてないで、ボクのものになりなよ、くーちゃん。ボクは強い魔獣が大好きなんだ。思う存分、人間を殺させてあげるよあ」

勝手に大狐に名前をつけ、頭上に舞い下りて半ば透き通った手を突きつけます。魔獣使いの力で服従させようというのです。管狐！とセシルとオリバンが叫びます。

すると、ケーン！と狐が鳴きました。大きく飛び上がって人面鳥にかみついていきます。ランジュールは悲鳴を上げて、また天井へ逃げました。

「ええ？ キミは自分から王女様を守ってるんだって？ だから、ボクのものにはならないって？ なにさ、それえ！」

その様子に白の魔法使いは我に返りました。すぐに仲間たちに命じます。

「我々はこの象を倒すぞ！ 深緑、正体を暴け！」

「今度こそ承知じゃ」

老人が杖を突きつけ、濃い眉の下から象の怪物をにらみつけます。とたんに天井まで届く巨大な怪物が縮み始めました。二本足から四本足になり、さらに小さくなって、普通の大きさの象に変わってしまします。

ところが象が急に駆け出しました。床に倒れたユギルと、それを抱き起こしているロムド王へ向かっていきます。縮んだとはいえ、やはり大きな象です。地響きが広間の床を揺らします。

すると、その目の前に二人の男が現れました。青い衣の大男と赤い衣の小男です。突進してくる象に向かってそれぞれの杖を突きつけます。とたんに、象がその場にばったり倒れました。それきり、まった

く動かなくなりませう。

その真上に白の魔法使いが姿を現しました。象に向かって落ちながら、鋭く杖を向けませう。

「そこだ！」

白い光がひらめき、象の腹のあたりで何かパンと弾けませう。小さな黒いしぶきがあたりに飛び散りませう。

落ちてきた白の魔法使いを青の魔法使いが受けとめませう。

「やはり闇が取り憑いてませうか！」

「ああ、闇の虫だ。象の中に棲みついて怪物に変えていたんだな」

答える女神官は武僧の腕の中です。それを見た赤の魔法使いが飛び跳ねながらわめきませう。

「ラ！ ナ、ダ、レハ！？ ツマデ、テル、アオ！」

「ああ、いやいや。これはいわゆる、ものはずみというもの」

「へ、変なことを言っな、赤」

女神官が真っ赤になりながら武僧の腕から飛び下りませう。そんな二人に異国の魔法使いがさらに食ってかかります。

「やれやれ。こんなときに何をやっとするんじやい」

深緑の魔法使いは呆れながらロムド王のそばに行って、ぐったりしている占者に手を当てませう。見る間にその怪我が治っって青年が目を開けませう。

「陛下、深緑殿」

「無茶をするでない、ユギル。そなたは占者だ。体を張っって王を守るのが役目ではないはずだぞ」

と王が叱りませう。珍しく、本当に厳しい顔と声です。

青年は体を起こすと、静かに答えませう。

「あのままでは陛下のお命がなくなると直感したので。わたくしならば、きつと命拾いするといっ予感もしてませうました」

同じく深緑の魔法使いに怪我を治してもらったゴリスは、そんな二人を見て微笑しませう。王が本気で怒っっているのは、それだけ占者を本気で心配していたからです。そして、一見冷静に答えているような占者も、実は感激に目を細めて、泣き笑いのような表情をしていたのでした。

「あとはあいつを倒すだけか」

とゴリスは言っって広間の中央を見ませう。そこでは、管狐くわきつねの背に乗っったセシルとオリバンが、人面鳥になっったランジュールと戦っっていました。

「ああもっ！ ホントに往生際が悪いなあ、キミたちって！」

ランジュールが急降下を繰り返しながらわめいてませう。

「いいかげん、ボクに殺されなったら！ 皇太子くんはとびきり綺麗に殺してあげるからさあ」

「ご免ごうむると何度言ったらわかる！ 貴様こそ、さっさと死者の国へ行け！」

とオリバンがどなり、大剣をふるませう。翼の先を切れそうになっって、またランジュールが舞い上がります。

「やあだよあ。ボクが黄泉の門をくぐるときには、皇太子くんと勇者くんの魂が手みやげさ。絶対そうするっって決めてるんだから、ボクを死者の国に行かせたかったら、皇太子くんもボクに殺されなくちゃ」

「そんなことはさせるものか！ オリバンに絶対手出しはさせない！」

と言っり返したのはセシルです。大狐の背中にまたがり、燃えるようなすみれ色の瞳でランジュールをにらみっつけてませう。

ふふん、とランジュールが笑いませう。

「勇ましい王女様だなあ。皇太子くんと熱々で、ホントに妬けるよね。悔しいから、こっしちやあっかなあ」

人面鳥のランジュールの顔が、かっくと口を開けませう。とたんにそ

こちら光の弾が飛び出てきます。魔法で攻撃してきたのです。けれども、それがセシルたちに当たる前に、管狐が大きく身をかわしました。狐の動きに合わせて、ふわりとセシルの背中で薄絹がひるがえります。

それだ魔法が床で破裂したとたん、招待客が悲鳴を上げました。物見高い貴族たちが広間に残って戦いを見守っていたのです。やめる！とセシルとオリバンが同時に叫びます。

うふん、とランジュールはまた笑いました。

「そぉかぁ、この手があつたね。急がば回れ。まずこっちを攻撃すれば良かったんだあ」

と見物客へ襲いかかっていきます。たちまち悲鳴が上がリ、貴族や貴婦人が逃げ出します。

「管狐！」

セシルの声に大狐が飛び上がり、貴族たちを守るように立ちはだかりました。オリバンがまた人面鳥に切りつけます。

とたんにユギルの声が聞こえました。

「殿下、危ない！」

反射的に身を引いたオリバンのすぐ目の前を、魔法攻撃が飛びすぎて行きました。貴族を襲うと見せたランジュールが、振り向きざま、口から発射してきたのです。セシルは管狐にしがみついていたので無事でしたが、オリバンのほうは体勢を崩しました。狐の背中から仰向けに転がり落ちます。

セシルとランジュールが同時に叫びます。

「オリバン！」

「もらったあ、皇太子くん！」

人面鳥が音を立てて羽ばたき、オリバンに向かって急降下します。

すると、またユギルの声がしました。

「白殿！ セシル様に剣を！」

白の魔法使いは突然の指示に一瞬驚き、すぐさま杖を振りました。淡い白い光が管狐へ飛び、セシルの手元で一本の剣に変わります。セシルの部屋に置いてあった彼女のレイピアです。

「飛べ、管狐！」

セシルの声に大狐が舞い下りてくる人面鳥と同じ高さまで飛び上がりました。セシルが剣を突き出して鳥の胸を貫きます。ギャーッと響き渡った絶叫は、ランジュールではなく、人面鳥本来の声でした。血を吹き出しながらオリバンの目の前に落ちていきます。

オリバンは即座に跳ね起きて怪物の首を切りました。血をまき散らして転がった頭は、いつの間にかランジュールから元の人面鳥の顔に変わっていました。

「あーあ、やられちゃったあ。せつかく捕まえたとびきりの人面鳥だったのになあ」

空中に幽霊の青年が浮いていました。赤い長い上着のポケットに両手を突っ込み、細い肩をすくめています。

「まったく、やかいいなお嫁さんを見つけたねえ、皇太子くん。魔獣使いの上に剣の腕まで立つなんてさあ。これじゃますます殺しくくなつたじゃないか。ま、あきらめないけどねえ」

のんびりした口調で物騒なことを言って、ランジュールはまた笑いました。

「ふふふ。さあ、皇太子くと勇者くん、今度はどっちの命を狙おうかなあ。まだ決まっていけないけど、きつとまた来るからね。今度こそ必ず皇太子くんの命はいただくから、それまでせいせい王女様と仲よくねえ。うふふふ……」

幽霊の青年は姿を消していきました。その痕を魔法使いたちが繰り返した攻撃が飛びすぎます。

「オリバン！」
 セシルは管狐くだきつねの背中から飛び下りました。両手を広げたオリバンの胸に飛び込み、しっかりと抱き合います。二人とも手には血に濡れた剣を握っています。

そんな皇太子と王女を、大広間の人々が見つめていました。

「オリバン、セシル姫」

と王から呼ばれて、抱き合う二人は我に返りました。玉座にロムド王が座り直していました。その両脇には、ユギル、ゴーリス、四大魔法使いが並び、広間の周囲には大勢の招待客がいます。それに気がついて、セシルは真つ青になりました。彼女は血に染まった剣を握り、後ろには見上げるような狐の怪物を従えています。何をどう言っても取り繕うことなどできない状況でした。

すると、オリバンがセシルの手から剣を取り上げました。自分のマントの端で怪物の血をぬぐい、床に落ちていた鞘に収めてセシルの手に戻します。

「私たちの命を守った大切な剣だ。恥じることはない」

と言い、自分が使っていた大剣も、やはりマントで血を拭き取ってゴーリスへ返します。その堂々とした態度に、セシルは何も言えなくなります。

ロムド王が再び呼びました。

「二人とも、こちらへ来なさい」

セシルはまた青ざめました。オリバンについて行きますが、足が震えるのを止めることができせん。自分は未来の皇太子妃として取り返しのつかないことをしてしまったのだと考え、王の前でドレスを広げてお辞儀をしたまま、顔を上げられなくなりませす。管狐くだきつねが心配して大きな鼻先をセシルの背中に押し当てましたが、それに気がつく余裕さえありません。

すると、ロムド王が言いました。

「オリバン、セシル姫　よくぞ広間の者たちを守った。すばらしい戦いであつたぞ」

セシルは思わず顔を上げました。驚いてロムド王を見つめてしまいます。その隣でオリバンが頭を下げていました。

「撃退に手間取って申し訳ありませんでした、父上。あの幽霊は私やフルートの命をずつつけ狙っているのです。皆を危険な目に遭わせてしまったことにも、すまなく思っております」

「皆、無事であつてなによりだ。特に、四大魔法使いとセシル姫の活躍は見事であつた。その大狐殿もな。我々を守ってくれたことに感謝する」

そのことばがわかったのか、ケーン、と大狐は返事をして、そのままセシルの腰の筒に消えていきました。おおつ、と貴族や貴婦人たちが声を上げます。その中に感心する響きを聞き取って、セシルはさらにとまどいました。不作法をしでかした彼女を非難する声ではありません……。

ロムド王は穏やかに笑いました。

「何故そんなに意外そうな顔をされるかな、セシル姫。ロムドには、自分を救ってくれた人物に感謝しないような、愚かで薄情な国民はおらぬぞ。そうであるう、皆の者？」

王の声はよく響きます。貴族や貴婦人たちはいつせいにうなずきま

した。誰かが手をたたき始めると、すぐに広がって、大きな拍手に変わります。

何も言えなくなっているセシルの肩を、オリバンが抱き寄せました。王に向かつて言います。

「これが私の妻となる人です、父上。私を助け、私と共にロムドを守っていく、未来のロムド王妃です」

大階段の上からトウガリと共にメノア王妃とメーレン王女が広間に戻ってきたところでした。皇太子のこのことばを聞いて、揃って笑顔になります。会場の拍手がいつそう大きくなります。

ユギルの隣には、リーンス宰相とレイー又侍女長に付き添われて、ラヴィア夫人が戻ってきました。戦いの間、安全な場所にいたので、怪我はありません。セシルと視線が合うと、夫人は眼鏡の奥で目を細めてうなずき返しました。まるで、それでよろしいのですよ、と言うように。

セシルは自分の右手を見ました。白い鞘に収まった剣を少しの間見つめてから、おもむろにそれを横に構えます。そして、彼女は床に膝をつき、王を見上げて言いました。

「わたくしは、このすばらしいロムドの一員となれることを本当に嬉しく思います。わたくしの心と剣は生涯この国と陛下のもの。国を守る方々と共に、ロムドのために尽くしていきたいと思えます。どうぞお受け取りください」

それは騎士が主君に忠誠を誓うときのことばでした。ドレス姿でひざまずき剣を捧げる彼女に、もう迷いやとまどいの表情はありません。

王は玉座から立ち上がり、自分から歩み寄ってセシルの剣を受けとりました。それを一度前にかざして、再びセシルの手に戻します。

「姫の忠誠は確かに受けとった。オリバンと共にロムドの未来を守り、国民を幸福と発展に導いていくてくれるように」

セシルは剣を受けとって一礼すると、オリバンの隣に立ち上がりました。白いドレスに金の髪の毛のすなりとした姿は、遠いナー ज्याの森に生える金陽樹によく似て見えます。

「姫の象徴の樹はロムドに根付きました。これからその枝葉を大きく広げ、嵐から国を守り、青き獅子を樹下に憩わせることでしよう」

とユギルが静かに言いました。未来を厳かに告げる占者の声です。再び人々が手を叩き始めました。美しく凛々しい皇太子妃へ、割れんばかりの拍手を送ります。

それを聞きながら、セシルは隣のオリバンを見上げました。そっとささやきます。

「やはり、私は普段は男の格好をしようと思う。あの姿が一番自分らしい気がするから……。かまわないだろうか？」

セシルは完全に男の口調に戻っていました。オリバンが笑って答えます。

「どんな格好をしても、あなたはあなただ。外見が中身まで変えてしまうはずはない。それに、私はあの姿が気に入っている。そのことばづかいもな」

「物好きだな……。だが、ありがとう」
頬を染めてほほえみ返したセシルを、オリバンがまた抱き寄せます。

金陽樹の姫を迎えた城に、拍手はいつまでも鳴り響いていました。

(2009年4月13日)